私本太平記

二

吉川英治

二人天皇のいずれが正統なのか。尊氏は逆賊で正成は忠臣か？　人間の業、権力の魔性故に欲望が狂い踊る無限の暗黒時代をかき探る。

六興出版

吉川幸次郎

私本太平記

第二巻　婆娑羅帖（続）　みなかみ帖　帝獄帖

江苏工业学院图书馆
藏书章

私本太平記　第2巻（全8巻）

平成2年6月25日　初版発行
平成2年11月10日　2刷発行

著　者　吉川英治
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社 六興出版
〒112 東京都文京区水道2－9－2
電話　03（943）3431（代表）
振替　東京1-92448

印刷・製本　中央精版印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。
ISBN4-8453-0408-2 C0093

目

次

婆娑羅帖（続）
上り地蔵……7
草もみじ……32
散所市……55
鷹の巣……76

みなかみ帖
石の降る夜……95
蝶の親……117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

初瀬ざんげ……136
みなかみの家……164
雨情風心……183
波々々……202
天皇御むほん……224
かわりばんこ……248
俊基斬られ……257
佐渡へ……271
くまわか草子……282

帝獄帖
山門の二皇子……295

婆娑羅帖（続）

上り地蔵

柳営四門は、非常の甲冑兵で、ごッた返しの状だった。

「やあ、執権御所には、ご異状はない。お引返し下さい。近くの火災も、あの通り下火でおざれば」

警備の将は、声をからした。が、後から後から、参入の御家人はひきもきらない。

当時の武士習性では、

火災即乱、乱即火災

「すわ」といった心理がすぐ手伝う。

まして、執権御所の近火とあっては、六浦、腰越の遠くからさえ、この夜、駒にムチを当てた武士が少なくなかった事であろう。

その上にもである。この混雑に加えて、底波のような噂が揺れつたわった。

ついさっき、華雲殿から典医寮の方へ、色を失ッて馳け出して行った数名の口から洩れた事かもしれぬ。誰いうとなく、

「太守の御重態らしい」

「執権どのが、御危篤とは、ほんとか」

などと、不安めいた騒めき立ちが、赤い夜空の薄れより早かった。

「さては、何かあったのか」

火を見て、兄の迎えに来ていた直義は、二重の不安に、いよいよ兄高氏の身が、心もとなく思われた。

「兄は、どこに」

もう両御門の広前も探し尽していたのである。この上は、まだ華雲殿の内かもしれぬと、諸侯ノ間、侍者ノ間、石庭の曲廊までを探しあるいた。すると、小御所の控え廂に、ひとり寂然と坐っている女性があった。

灯影はない。半身は簾にかくれ、唯、半身の横顔が、うッすらと、外の夜空に透いて見える。その線

が、登子に似ていた。
「もしや……。そこにおいであるは、姉君ではございませぬか」
「オオ、御舎弟さまですか」
「直義です。近火はともあれ、余りな御帰館の遅さに、お迎えに来てみれば、果たして、なにか華雲殿の御宴に異事があった様子。兄上はいかがなされたでしょうか。兄はまだ御前からお退がりではないのですか」
「いいえ」
登子は、おちついた声だった。
「……殿はここにおられまする。直義さま、おすすみ遊ばしませ。さいぜんから、ようお寝みの御容子ですから」
「えっ？　かかる場所で」
直義は、坐っていた所から、膝歩きにツツツツと、簾の内へ進み入るなり、
「ど、どうしたのです、寝ているとは。……やあ、大の字形の、この態はまた」
唖然として、ただ見入るばかりだった。伸々と横たわっている大きな四肢には、登子の裲襠が掛けてある。――ふと、鼾声がやんだのは、少しは酔がさめかけているのかもしれない。
「これやひどい酒の匂いだ。こんな兄は見たこともない。よう姉君は御辛抱しておいでででしたな」
「でも、この登子をお案じ給うて、私の身を、ここに探し当てると、もう堪らぬ、一ト眠りじゃと、横におなり遊ばしたのでございました。さしての御乱酔とも思えませぬ」
「して、執権殿の御前の首尾は」
「それはもう……」
と、笑いこぼして。
「どちらもどちら。天狗と天狗の御狼藉でございました」
直義は、あきれた。
大宴の始終、高時の物狂い、天狗騒ぎなど、それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

を話す登子からして、しごく平然なので、美しいこの嫂の心理までが、いぶかられた。
「ではその間、あなたは、どうしておいでだったのです」
「わが夫をおいて、ひとり帰るわけにもまいりませぬ。この小御所口の控えまで退がって、簾の蔭から、遠く眺めておりました」
「恐ろしくもなく？」
「それはもう、恐おうて、恐うて、一ときは、どうなるやらと、身もふるえながらに」
そうは言いながらも、登子の姿のどこにも、そんな萎縮は見えもしない。まだ小むすめとも言えば言えるこの嫂は、ひょっとしたら白痴か、なにか足らないのではあるまいか。さもなくば……と、直義は思った。
「ともあれ、姉ぎみ。……いつ迄、ここにいるわけにはなりませぬ。直義も手を貸しましょう。兄上を起してください」
すると、寝ていたはずの高氏が、むっくり起きて、体の上の褥襠を、登子へ返した。
「弟。案じて来てくれたのか」
「ヤ、お眼ざめだったので」
「よいここちで、そこの話を、遠くのように聞いていた。宵は地獄、深夜は極楽。いや、今日一日はおもしろかったな」
「大杯また大杯と、御辞退もせず、おかさねになられた由。なかなか、まだ酔はお醒めになりますまい。……さ、直義の肩におつかまりください」
「つかまって、どうするのか」
「はや夜半。ともあれ、御帰邸なされては」
「ま、待て。……高氏、大酔はしたが、性を失ったとは思わぬ。何をやったかも覚えておる。半分は酒のしわざ、半分はこの身の本性……」
「何ンたる沙汰。お物狂いの果て、執権どのにも、御重態とか」
「あわてるな。ははは、御発作にすぎまいぞ。十

日もお臥せりになれば、またケロリとなされるに違いない。そう参らぬのが、お薙刀の先にかかって怪我をした田楽役者や近習たちだ」
「まさか、兄上には」
「だいじょうぶ。酒乱はしても、狂乱はしていない。だが騒動まぎれに、高氏逃げたり、と言われては心外だし、言い開きも立たぬゆえ、寝ながらの宿直と腹をきめていたのだ。――おぬしが見えたのは幸よ。登子をつれて、ひと足先に帰ってくれい」
「いや、御一しょに退がりましょう。辻々はまだ、あの火事騒ぎ。直義にも、おきれいな嫂の保証はできません。旁々、兄上にしても、唯ここにおいでのみでは、無意味ではございませぬか」
「それも、そうか。では二人とも、小町御門の袖の外にて、わしの行くのを待っておれ」
高氏は、先にどこへか出て行った。まだ、その足どりは蹌踉として見える。しかし高時の〝常ノ御所〟へ近づくと、しっかりしていた。

一室に入って、高時の侍者に会い、また典医の口から、高時の容態も聞きとった。さらに、事のついでのように、佐々木道誉の姿を求めたが「――道誉どのは、如何なされしか、どこにもお見えなされませぬ」との、侍たちの返辞に、
「……さらば、よろしく」
と、言いのこして、退出を告げ、やがて、二人を待たせておいた小町御所の外へ退がった。
「直義、乗物は？」
約をたがえず、二人はいたが、見れば、登子の輿も自分の乗馬も見えぬので、高氏が訊ねたのだ。直義は答えて。
「いや、兄上たちは昼、正門の若宮御門からお入りだったはずでしょうが」
「ア、そうそう。供の者も乗物も、若宮御門の方へおいてあったのだな。――そこはまだ、火事の混雑ならんと、つい、小町御門でと口に出てしもうたが」

「ここへ、姉ぎみ一人おいても行けずと、むなしく佇んでいましたが、お待ち下さい。私が一ト走りして、輿の者や、駒脇共へ、小町御門の方へ廻れと、申しつけて参りますから」

走りかけると。

「直義、それには及ばん。おぬしの駒は、それであろうが。——その馬貸せ、登子を乗せて、わしは、ぽつぽつ先へ行こうよ」

「姉ぎみと、相鞍で」

「夜半すぎだ、おかしくもあるまい」

「お睦まじいと、昼なれば、鎌倉じゅうが羨みましょう。では、私は、正門の方へ声をかけて、おあとより参りまする」

「この兄は、吾儘者だな」

「なんの。いざ、どうぞ」

さきに登子を乗せ、高氏もすぐ鐙を踏む。登子は、かいどりを被衣にした。桂衣なので、横乗りに、自然、鞍つぼの良人に甘えたような姿態になる。

なおまだ、火事場の余燼が空には赤く映え、町は夜も丑満を何処ともなく騒々しい。しかし、ふたりを乗せた駒音は、愉しむごとく、トボトボ行く。

——宝戒寺の並木、滑川の水音、大蔵への道はだんだんに暗かった。

「のう登子。今日は、そなたも、あきれたであろ？」

「ええ、人々の婆娑羅には、あきれましたが」

「自分の良人には」

「驚きもいたしませぬ」

「ははははは、強がらいでもいい」

「いいえ、真実」

「よくよく物驚きを知らぬ女子よな」

「羅刹の妻でございますもの」

「……むむ」

二人は、結婚四日目の雨夜の契りを思い出していた。

しばらく、黙りあって。

「いや思えば以前、聞いていない事もなかった。赤橋どのの妹君は、いかなる人へ嫁ぐであろう。あの女性を末始終よう持つほどな者は、鎌倉御家人あまたな中にもおるまいが、もしあれば、その男の顔見たいと」

「そのような蔭口、殿もお耳になされましたか」

「その男が、わしだった。――降るほどな縁談、みな拒んでいたそなたが、選りによってと、笑われたはずよ」

「いといませぬ。さまざま人は申しまする。この私を、古い平家の女人や平安の女性に比して、鎌倉の世が鋳て生んだ鎌倉型の女子じゃなぞとも」

「そりゃ、中っている」

「ま、殿までが」

それきり二人の声もしない。折々、石にひびく蹄と、滑川の暗い川音だけがつづく。

すると後から、追っかけ足で、松明、空輿、馬上の人影などが、近づいて来た。すれすれに側を馳け抜けて行くのを見ると、それは直義たちだった。

直義はふり向いて、相鞍の二人へ言った。

「やあ、先馳け御免。……お二た方、ごゆるりと」

――執権御不例

と一般にまで、高時の病が公にされたのは、かなり日も経てからだった。

なぜか、それ迄は、華雲殿のらちゃくちゃない騒動もくるめて、柳営はこれを、秘していた。

「困ったもの」

と、眉をひそめ合って、当夜の聞取りやら、善処に当った重臣の意が、さしずめ、そこに帰したのだろう。

世上への外聞もまずい。

内には、綱紀の頽廃を招こう。

従来とて、高時の風狂的発作は一再でないが、おちついた後は、月余で常態に復している。こんどは前例にないお物狂いであったが、やがては御本復を

仰ぐに相違あるまい。「……天下多事のさい、かかる御風狂沙汰は、都への風聞もいかがなものか。まずまず秘しおくに如くはなし」と言うのが、一致した意見であったかと思われる。

ところが、その後。

鎌倉童の遊戯に〝天狗遊び〟とよぶものが流行り出していた。たそがれ頃の辻々ではよく見かけるのである。小ッこい洟タレ天狗や皮膚病天狗が、手に笹の枝を打振り打振り、口々に、

……えうれい星

えうれい星

怪雲殿の

えうれい星

と、歌うのだった。しかも声の有りッたけ、歌い狂い、舞い狂い、往来の女衆には悪さをするし、街の迷惑などもかまッたものではない。大人たちが、防衛のため、大喝したり、水でもぶッかけると、むしろ彼らは本懐な気分にでもなるのか、一そう狂舞の図を描いて、

天知る

地知る

天狗知る

魔界外道は

火のくるしみ

水くれ　水くれ

水をくれーいッ

と、絶叫をくりかえし、その果て、わアッと囃して逃げ出すのである。

いったい、こんな童戯が流行り出した根元は何なのか。たれが彼らに教えたのか。

いや、現象を見てからの、そんな、せんさくなどは愚にちかい。上が下へ映るのは、月と露、雲と地の翳り。なんの不思議もないことだ。民の諷謡は、自然に湧くものだとは、唐宋の古史もいっている。なにも知らないはずの民土の耳目ほど、何でも知っているものはない。

が、往々には、誤まった、いわゆる巷説もよく弄ばれる。たとえば、近来の「……執権どのは、先ごろ、天狗に憑かれて御他界されたそうな」などは、その類であった。――当然な幕府要路の関心が、

「こは、捨ておけず」

となって、俄に、御不例と公表したのは、手おくれにせよ、一般の疑惑をとくに、多少の効は無くもなかった。

しかし、こんどに限っては、以後なかなか御全快披露目の触れもない。年の末、十一月下旬、高時の子、万寿麻呂の出生があって、それの祝いはあったが、お床払いとは、ついに聞えず仕舞いであった。

ところで、高氏の方だが。

柳営の諸事情が、彼には幸していたものか、華雲殿の件は不問のまま、その年を越え、彼のぶらり駒は、依然何の変哲もなく、武者所の門へ折々通っていた。

七里ケ浜の〝大馬揃い〟は、恒例、正月二十日だった。

これは壮観をきわめる。

武権鎌倉の府の強兵幾万、なお健在なるかを、この日には、思わせる。

〝うつつなき人〟高時の下でも、俗に七座とよぶ、米座、塩座、油座、銅座、絹座、魚座、材木座などの問屋経済の基盤やら、また、一令これぐらいな軍はいつも動かしうる実力あっての鎌倉幕府なので、田楽や白拍子や闘犬や、それらの遊戯三昧のみで、万戸の炊煙が賑わっていたわけではない。

御家人にしても、又そうだ。

高時好みの細太刀を佩いて、忍び香をプンとさせ、良馬は飼わぬが闘犬をつなぎ、田楽修行も忠勤と放言したり、仮粧坂や大磯小磯の妓の品さだめに通を誇る――といったふうな武士のみが、あふれていたのでも決してない。

むしろ、数は逆である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.